

ゼパニヤ書ノート

2024 版

Dr. Thomas L. Constable

紹介

タイトルと作者

この本のタイトルは著者の名前に由来しています。「ゼパニヤ」とは、「ヤハウエが隠れている（または継続的に隠れている）」、「ヤハウエに隠されている」、「ヤハウエの番人」、または「ヤハウエが大切にされている」を意味します。預言者の名前の語源をめぐって不確実性が生じており、学者たちはこの点について異論を唱えています。私は個人的に「ヤハウエによって隠されている」と言う訳し方が好きです。[\[1\]](#)

ゼパニヤはユダのヒゼキヤ王の曾孫(1:1)と思われます。これはまったく確実ではありませんが、私自身おそらくそうであると考えます。旧約聖書のページに登場するヒゼキヤは他に二人だけであり、二人とも捕囚後の時代に生きていました。年代記記者はこれらのうちの 1 つについて言及し（第一歴代 3:23）、エズラ記とネヘミヤ記の著者はもう 1 つについて言及しました（エズラ 2:16; ネヘミヤ 7:21）。

もしゼパニヤが本当にユダヤ王の子孫であったとしたら、彼はダビデとソロモンを除けば最も王家の血が流れている預言者となるでしょう。彼の直接の先祖の名前を除けば、私たちは彼についてこれ以上確かなことは何も知りませんが、彼がエルサレムに住んでいたということはかなり確実のようです(1:10-11)。これは王の子孫としては理にかなっています。[\[2\]](#)

統一性

ゼパニヤの統一性に対する批判は、この本の解釈者に大きな影響を与えることはありませんでした。ゼパニヤがニネベの滅亡を予言したこと(紀元前612年、2:15)をきっかけに、預言者が未来を予言できるとは信じていない批評家たちは、この本の日付をその出来事の後に遡ったと考えました。言語とスタイルの違いにより、一部の批評家はこの本を分割し、そのさまざまな部分をさまざまな情報源と特定することに影響を与えました。しかし、本全体のメッセージと流れの統一性、さらにその統一性に対する古代の信念により、ほとんどの保守的な学者はゼパニヤを一人の作家の作品であるとみなすようになりました。[\[3\]](#)

目付

ゼパニヤはユダのヨシヤ王の治世中(紀元前640～609年;1:1)に奉仕しました。学者たちは、ゼパニヤが治世中にいつ書いたか、紀元前622年頃に始まったヨシヤの改革の前^[4]か後^[5]かについて議論しています。両方の観点がサポートされています。^[6]ゼパニヤはヨシヤの改革について明確に言及しておらず、議論を解決するには証拠が本当に不十分です。^[7]しかし、ゼパニヤはしばしば申命記について言及しました。ヨシヤの改革のきっかけとなった律法の発見により、人々が律法の発見前よりも意識するようになったために、そうしたのかもかもしれません。

「ゼパニヤの預言はヨシヤの改革を後押ししただろう。」^[8]

将来のニネベの滅びについてのゼパニヤの言及(2:13)は、彼の著作が紀元前612年のその出来事の前に間違いなく修正されたことを示しています。それで預言者は紀元前640年から612年まで奉仕をしました。彼の同時代人にはナホム、ハバクク、エレミヤがいますが、エレミヤの宣教は紀元前 586 年に起こったエルサレムの滅亡後も続きました。

構成の場所

1章10-11節のエルサレムへの言及は、ゼパニヤがエルサレムをよく知っていたことを示しているようです。彼は南王国に奉仕していたことから、おそらくユダ、そしておそらくエルサレムに住んでいたと思われます。

観衆

ヤハウエの言葉がヨシヤの治世中(紀元前640年から紀元前609年)にゼパニヤに届いたという事実は、北王国が紀元前722年に滅亡したため、彼が北王国に仕えることができなかったことを意味します。したがって、ゼパニヤの聴衆はユダの人々、つまり生き残った南王国で構成されていました。彼が君主、裁判官、預言者、祭司に言及していることからわかるように、彼は一般のイスラエル人ではなく、主に社会の上層部に奉仕していたと思われます(1:8-9; 3:3-4)。

ヨシヤの治世中のユダの政治状況はかなり平和的でした。紀元前 722 年にアッシリアがサマリアを占領した後、アッシリア帝国は衰退し始めました。その衰退とともに、新バビロニアの初代王であるナボポラッサル(紀元前 626～ 605 年)がバビロニアを前進させ始めました。アッシリアは衰退し、バビロニアはメディア人とスキタイ人の支援を受けて紀元前612年にニネベを破壊するまで前進し、数年後にはアッシリアに代わって古代近東の支配勢力となりました。これは紀元前 605 年、バビロニア人がカルケミシュでアッシリア人とエジプト人を破ったときに起きました。ユダは近東政治のこの過渡期に恩恵を受けました。ヨシヤはアッシリアの宗教慣行の一部を取り除くことができ、ユダの領土を北のナフタリ部族の領土まで拡張しました。残念なことにヨシヤは紀元前609年に早世してしまいました。(第二歴代 35:20-27 参照)。

ヨシヤの邪悪な先人であるマナセ(紀元前695～642年)とアモン(紀元前642～640年)は、50年以上にわたってユダの民に主(ヤハウェ)から離れるように勧めていたため、彼らの中に邪悪が染み付いていました。ヨシヤ治世の18年(紀元前622年)、祭司ヒルキヤは神殿でモーセの律法を発見し、ヨシヤはそれを読んだ後、ユダ全土に大規模な改革を導入しました。

ヨシヤの改革は正式で良いものでした。彼はその地で偶像崇拝の多くを取り除き、またその中でも過越の祭りを復活させることに成功しました。ヨシヤの広範な改革のリストについては、第二列王22:4-25、および第二歴代34:3-35:19に記載されています。しかし残念ながら、エレミヤが以前の預言で明らかにしたように、彼の改革はほとんどの人々の心を変えることはありませんでした。したがって、ゼパニヤが奉仕した人々は、ヤハウェへの本当の献身があまりなく、形式的な宗教の長い歴史を持っていました。

目的

当時のユダヤ人は心の中で主と正しく向き合う必要があったため、神はゼパニヤに預言の言葉を送りました。預言者は、神がユダの邪悪さに対して裁きを送るつもりであると告知しました。

「ゼパニヤの小さな預言は、神の愛の暗黒面を示している。神は愛の神であると同時に裁きの神でもある。ゼパニヤ書の冒頭は裁きの鳴動で始まり、裁きがこの書ほど過酷な形で語られることはないだろう」。^[9]

ゼパニヤはまた、国内の敬虔な少数の残りの者たちに、主が彼らを守り、将来のイスラエルの世界的な究極の祝福に関する約束を忠実に守ってくださることを保証しました。おそらく1章7節は、他のどの聖句よりもこの本の要点を要約しています:「口をつぐめ。神である主の前で。主の日は近い。」^[10]

「ある意味、時代の歴史はゼパニヤのメッセージについて何も語ることはない。本書全体を通して、歴史的出来事との距離感が漂う。……ゼパニヤ書は歴史の流れに根ざしている……しかし、彼の関心はただ目的にのみある——終末——この世界を運営しようとする人間の悲惨な努力が、素晴らしいクライマックスで主の裁きと希望の目的と一致する日である。」^[11]

「…ゼパニヤの目的は、主の日にユダに来る裁きを告げることだった。しかし彼は、裁きは地上のすべての国々に及ぶだろうと述べ、主の日がイスラエルと異邦人にも救出をもたらすことを示唆した。」^[12]

「ゼパニヤの主の日は、その初期の段階では、紀元前6世紀後半から5世紀初頭にかけてのバビロニアによる近東征服と関連しているはずである。それと同時に、裁きの宇宙的な規模(1:2-3、18;3:8)とその最終的な結果は、イスラエルの救いと諸国の

回復に他ならない。つまり、預言はゼパニヤの時代に起こった出来事だけに限られることはないということである。預言はゼパニヤの時代のときに預言者は、近い出来事と遠い出来事を混ぜ合わせながら、統一された未来像を提示したのだ」。[\[13\]](#)

「したがって、彼のテーマは『世界の歴史の完結』にはかならない。」[\[14\]](#)

文学形式

「ゼパニヤの作風は、構成が統一され、調和がとれていることに加え、文体がエネルギー溢れるものであることが最大の特徴である。迅速で効果的に脅しと約束を交互に書かれていることも彼のスタイルを特徴づけているといえる。」[\[15\]](#)

「ゼパニヤ書は 1:1 と 2:10-11 を除いてすべて詩である。」[\[16\]](#)

「ハバククの預言の形式は(私たちの捉え方でいえば)より主観的であるが、ゼパニヤの預言はより客観的である。」[\[17\]](#)

「ゼパニヤがとても優れている詩人であるとは考え難い。彼はイザヤに匹敵するものではなく、特にこの点ではホセアにさえ匹敵できない。…彼には伝えなければならない緊急のメッセージがあり、その責任を果たすために最も直接的かつ強力な方法で伝えているのだ。彼は気品や魅力に欠けていたが、その演説の勢いと明晰さによってある程度償われた。彼は迫りくる恐れを非常に鋭く認識していたので、それを生き生きと説得力を持って聴衆に伝えることができたのである。ヤハウエの日の描写がより現実的になる。」[\[18\]](#)

「用いられる文学的ジャンルには、裁きの託宣(1:2-3、4-6、8-9など)、応答の呼びかけ(1:7、2:1-3、3:8)や賛美への呼びかけと賛美の詩篇(3:14-17)を含み、また救いの託宣(3:9-13、18-20)がある。」[\[19\]](#)

独特の機能

ゼパニヤ書は「預言者たちの神託の概要」[\[20\]](#)「旧約聖書の預言書の『読者のダイジェスト(要約)』」[\[21\]](#)と呼ばれています:その理由とは第一に、ゼパニヤの一般的なメッセージは、他の多くの預言者たちのものと類似しているところがあること、そして第二に、彼は他の預言者の何人かと同じ用語を用いていることです。(1:7とハバクク2:20、1:7とヨエル1:15、1:7とイザヤ34:6、2:14とイザヤ13:21、34:11、2:15とイザヤ47:8参照)。これらの類似点は、ゼパニヤがこれらの預言者や他の預言者を引用していることを示しているのかもしれませんが。[\[22\]](#)

「ゼパニヤはヨエルとオバデヤのメッセージを再紹介したが、彼にとって主の日は世界規模の裁きの日であると同時に、ユダが罰せられる日でもあった。」[\[23\]](#)

「オバデヤ、ヨエル、アモス、イザヤはみなこの日について語っていたが、ゼパニヤだけがその裁きの普遍性を彼らよりも力強く強調し、同時に驚くべきことにその成果の一つとして諸国民の改心を預言した。」[\[24\]](#)

「ゼパニヤの言語は、他の預言者、特にエレミヤとエゼキエルの言語に最も近い…また、初期の預言者、特にアモスとイザヤ、そして後の申命記-イザヤ[イザヤ40-66]の反響もある。」[\[25\]](#)

ゼパニヤ書には、他の旧約聖書の本よりも多くの「主の日」への言及が含まれています。この言葉は、時には過去を指し、時には近い未来、時には遠い未来、そして時には遙か遠い終末的な未来を指します。この言葉は常に、私たちが認識することができる方法で、神がこの世界において働かれておられる期間を指します。通常、それは爆発の時を指しますが、祝福の時を指すこともあります。

『ヤハウエの日』は、ゼパニヤ書全体を統一するテーマとみなされるかもしれない。」[\[26\]](#)

ゼパニヤ 1:14-18 は「新たな黙示録」と呼ばれています。[\[27\]](#) このペリコープ（本文の箇所）には、いつかユダヤ人の黙示録文学で顕著になるであろう内容が含まれています。[\[28\]](#) 「黙示録」は、世界の壊滅的な破壊を描写する文学の一種です。

神学的に、ゼパニヤはヤハウエの主権的正義(1:2-3、7、14-18; 3:8)と悔い改めた者を受け入れる主の意志(2:3)を強調しています。また預言者は人間の邪悪さも強調しました(1:3-6、17; 3:1、4)。ヤハウエとエルサレムの関係というテーマは、ゼパニヤ書にも顕著に表れています(1:4-13; 3:1-7、11-17)。

「ユダの懲らしめにおける)神の器は、ハバククによって名指しされた(すなわち、バビロンである)。むしろ、彼はユダの前に、その反対側、すなわち神ご自身の仲介者を持ち出した。神はユダに、ご自分の道具の中にご自身を忘れることを望まれない。それゆえ、すべては神に帰する。」[\[29\]](#)

構造的には、この本は、1 つの一貫したメッセージを構成する、慎重に作成された神託のコレクションであるといえます。[\[30\]](#)

「ゼパニヤ書には二つや三つの預言的演説が含まれているのではなく、預言者の口頭宣言の真髓が一つの長い預言に凝縮されている…」[\[31\]](#)

「ゼパニヤの預言はより一般的な性格を持っており、裁きと救いの両方を全体として包含し、一つの完全な全体像を形成している。」[\[32\]](#)

概要

- I. 見出し 1:1
- II. ヤハウエの裁きの日 1:2-3:8
 - A. 世界に対する裁き 1:2-3
 - B. ユダに対する裁き 1:4-2:3
 - 1. ユダの裁きの原因 1:4-6
 - 2. ユダの裁きの流れ 1:7-13
 - 3. ユダの裁きの差し迫りと恐れ 1:14-18
 - 4. 悔い改めへの呼びかけ 2:1-3
 - C. イスラエルの隣国に対する裁き 2:4-15
 - 1. ペリシテに来る裁き 2:4-7
 - 2. モアブとアモンに来る裁き 2:8-11
 - 3. エチオピアに来る裁き 2:12
 - 4. アッシリアに来る裁き 2:13-15
 - D. エルサレムに対する裁き 3:1-7
 - E. すべての国に対する裁き 3:8
- III. ヤハウエの祝福の日 3:9-20
 - A. 国々の浄化 3:9
 - B. イスラエルの変容 3:10-20
 - 1. イスラエルの浄化 3:10-13
 - 2. イスラエルとヤハウエの喜び 3:14-17
 - 3. イスラエルの再集結 3:18-20

J. シンドロー・バクスターの概要は注目に値する：[\[33\]](#)

内を見よ！ — ユダに来る怒り (1:1-2:3)

エホバが裁かれる目的 (1:1-6)

エホバの日はもう目の前 (1:7-18)

そして——エルサレムへの嘆願 (2:1-3)

周りを見渡せ！ — すべての国に訪れる怒り (2:4-3:8)

西、東-フィリスティア、モアブ、アモン (2:4-11)

南、北 - エチオピアとアッシリア (2:12-15)

そして、エルサレムに「災いあれ」 (3:1-8)

その先を見よ！—怒りの後に、癒しがくる (3:9-20)

異邦人の改宗 (3:9)

契約の民の回復 (3:10-15)

そして、新しいエルサレム (3:16-20)

メッセージ

ゼパニヤ書の鍵となるのは「主の日」という言葉です。このフレーズは、旧約聖書のほとんどの預言文献に登場します。預言者たちがこの言葉を使う際、「主の日」は過去の日、比較的近い将来の日、または遠い(終末論的)未来の日の場合があります。それは、神が人間の事柄において明らかに働いておられる日です。

「主の日」という言葉がどこにでも出てくると、それは常に人間の「日」との対比を示しています。人間の日とは、人間が人類の事柄を支配していると思われる日(期間)のことです。それは神にとって忍耐の日です。主の日とは、神が人間の事柄を明らかに支配している日のことです。それは神の裁きとともに祝福の日でもあります。「主の日」という言葉は決してゼパニヤに特有のものではありませんが、この本のメッセージの鍵となります。ゼパニヤは他のどの預言者よりも頻繁にこの言葉を使いました。それは彼の重荷であり、彼は他のどの預言者よりもこの言葉の意味を説明しています。

ゼパニヤはユダのヨシヤ王の治世中に奉仕しました(1:1)。注目に値するのは、預言者が、ユダの歴史に対するヨシヤの偉大な霊的貢献であったヨシヤの改革に対して言及しなかったことです。おそらく言及されなかった理由は、ヨシヤの改革がまだ始まっていなかったからでしょう。あるいは、多くの理由は、それらは始まっていましたが、それはユダヤ人全体の霊的生活の復活の結果ではなく、ヨシヤのヤハウェへの個人的な献身の結果であったからかもしれません。フルダの預言はこの違いを反映しています(第二列王22:14-20、第二歴代34:22-28参照)。ゼパニヤはヨシヤの善良な心には注目しませんでした。ユダ人の霊的な必要に配慮しました。この王と臣下との対比は驚くべきものです。

ゼパニヤが預言した「主の日」とは、神がユダとエルサレムの民を裁く終末の日のことです。この裁きは、主の終末の日の最初の部分、後の啓示で「艱難時代」と特定される期間に行われます。ゼパニヤはまた、裁きの後の回復を預言しました(3章)。これは、主の終末の日の後半を指し、後の啓示では「千年王国」(キリストの地上における千年統治)とされる期間です。

しかし、ゼパニヤは千年王国の後でも主の終末の日を念頭に置いていました。このことは、ゼパニヤが表現した荒廃の程度や、彼が描いた復興の描写を見れば明らかです。その「主の日」とは千年王国の終わりの主の裁きであり、現在の地と天の破壊とそれに続く新しい天と新しい地の創造が含まれます。

他の啓示は、将来の裁きとそれに続く回復の期間が 1 つだけではなく 2 つ実際にあることを理解するのに役立ちます。それによってわたしたちはゼパニヤの預言だけを持っていたのではないかと結論づけることになるかもしれません(第二ペテロ 3 章;黙示録参照)。

主の日に関する啓示こそがゼパニヤ書における時代を超えた価値です。この本では、その日がいつ来るのかは明らかにされていません。この本の唯一の年代順の参照は、一番はじめの一節にのみ書かれており、歴史の中でゼパニヤの奉仕の位置を示しています。この本は、不確定な未来において神が裁かれる様子を描いています。これは、侵略してきた兵士たちの軍隊や人間の手段による裁きではなく、それは神ご自身からの直接の裁きなのです。

この本が主の来られる日について明らかにしていることは3つあります。それは、その内容、範囲、意図です。

主の日の内容は1章2節から3節で明らかです。神は、最終的に人々に責任を問うという一般的な行政上の意味ではなく、天変地異の裁きにおいて人類に復讐を実行するというより狭い意味で、直接的かつ積極的な報復をもって地球を訪れるということです(1:14-16)。この裁きは人間の不信仰に関わらず下されます(1:12)。人々が神を無視するとき、神は人類の歴史にダイナミックに超自然的に侵入して裁かれます。ペテロの主の日の描写は驚くほど似ています(第二ペテロ3:1-10)。今日の人々は、この二人の預言者が昔に言ったであろうことを話しているのです。彼らは、神はこのように裁きに決して介入しないと断言しているのです。ゼパニヤ書の偉大な記述は、神は近い将来にこれを実際に行うということです。

この判決はどの程度の範囲で下されるのでしょうか？ゼパニヤは、それが差別的なものであることを明らかにしています。全人類も苦むこととなりますが、彼の民イスラエルがこの特に裁きのターゲットとなるでしょう(1:12)。1:12からわかるように、罪の最終段階は自己満足と無関心です。

過去の大帝国の破壊に先立って自己満足と無関心がしばしば起こってきたことは、歴史の興味深い事実です。アッシリアは自己満足で無関心だったため、バビロニアに陥落しました(ナホム参照)。ダニエル5 章に書かれているバビロニア帝国の滅亡を思い出してください。ローマ帝国は、自己満足で無関心になったため、北からの西ゴート族によって滅びました。そして以前、北イスラエル王国、後に南ユダ王国が、同じ理由でそれぞれアッシリアとバビロニアに滅ぼされました。

こうした状況(自己満足と無関心)を生み出す精神は、神と神の言葉を無視することです(3:1-2)。そのような精神の結果、民の指導者たちは本来の召使としての役割を放棄し、自分を肥やすために民を虐待するようになります(3:3-4)。

ゼパニヤを読むことは、核災害についての SF 映画を見るのと似ています。そこには、生命も花も果物も実も美しさもない、不毛で無人の風吹きさらしの風景だけが残ります。何がこの

恐ろしい状態を引き起こすのでしょうか？その理由は、多くの人々が自己満、また無関心で神を軽視し無視しているからです。そのような人々は神の声に従わず、神の訂正を受けとらず、神を信頼せず、また神に近づこうとしません。彼らは物質化され、自己中心的になり、贅沢に暮らし、自身の危険に気づいていないのです。そこで神が介入し、彼らの自己満足を混乱に変え、彼らの秩序ある生活を混乱させ、彼らの無関心を罰します。残っているのは風に吹かれた砂漠だけです(例:洪水)。

この恐ろしい活動の意図は何なのでしょう？それは、神ご自身が被造物の中で王位に就かれる、新しい秩序の創造なのです(3:17)。この預言の第3章は、第1章と第2章で得られたものとは大きく異なる未来像であるため、別の人が書いたに違いないと言う評論家もいます。第3章では、悲しみの代わりに歌を、利己主義の代わりに奉仕を、散らかされる代わりに団結すること、といったことについて説明しています。それがこの判決の趣旨です。驚異的な回復は、壊滅的な懲罰の後に起こるでしょう。

この本には生きたメッセージが2つあります。一つ目に私たちは、この来るべき裁きとそれに続く回復の確信を喜ぶことができること、そして、もう一つはこの来るべき裁きとその後の回復を考慮した時、私たちには責任があるということです。

神の裁きの終わりに現れる「神の栄光を期待して祝う」ことは、私たちの特権です(ローマ5:2後半参照)。主の日には、破壊するすべてのものの破壊が伴いますが、同時に、歌、奉仕、団結の新しい時代が始まります。その時代はまずキリストの千年統治であり、次に永遠国家となります。

「義が宿る新しい天と新しい地」(第二ペテロ3:13)の到来を待ち望みながら、聖く敬虔な生活を送ることも私たちの責任です。私たちは、生活の中で「しみも、傷もない」神との平和を得るために、熱心に努力する必要があります(第二ペテロ3:14)。私たちは、蔓延している「不誠実な人々の誤り」(つまり、自己満足と無関心、第二ペテロ3:17)のせいで自分自身の忠実さから離れてしまわないように用心する必要があります。そして私たちは「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識の中で成長し続ける」必要があります(第二ペテロ3:18)。喜びと責任ある生活:これらの特徴は、主の日を待ち望む人々の生活を区別する必要があります。

この本のメッセージは次のように言えます。神は歴史に壊滅的に介入し、人類の自己満足と無関心を裁き、神の民を本来享受することを意図していた祝福の状態に戻されるでしょう。

[34]

説明

I. 見出し 1:1

以下に続くのは、ユダのヨシヤ王の治世中(紀元前640～609年)にヤハウェが「ゼパニヤに」与えた「言葉」です。この「言葉」には、主が預言者に語られたすべてのことが含まれており、また後世のために記録するよう導かれた(ホセア1:1、ヨエル1:1、ミカ1:1参照)。これは神が神の僕の一部である預言者を通して与えた神の啓示でした。

ゼパニヤは自分の系図を記録しましたが、これは預言書の中で最も長い預言者の系図です。それはゼパニヤの曾曾祖父、あるいはおそらくはもっと遠い親戚であるヒゼキヤまで 4 世代前に遡ります。上記の「はじめに」の「筆者」の項で述べたように、このヒゼキヤがその名前を持つユダの王であったことを証明することも反証することも不可能です。イスラエルの君主制時代には人々は非常に若くして結婚していたため、年代的に言えば彼はそうであった可能性があります。

このヒゼキヤはおそらく王だったのではないかと思います。その名前は一般的ではなかったことと、ヒゼキヤが重要な人物であった場合にのみ預言者の家系をここまで遡るのが理にかなっているからです(ゼカリヤ1:1参照)。^[35] 通常、自分たちの先祖を記録した預言者は自分たちの父親だけを名指しました(ヨハネ1:1、ヨエル1:1 参照)。旧約聖書にはヒゼキヤ王の子孫に関する完全な系図はありません。

II. ヤハウェの裁きの日 1:2-3:8

ゼパニヤの預言はすべて「主の日」についてです。イエスは、この「日」について2つのことを明らかにしました。1 つ目は、この日には裁きが含まれること(1:2-3:8)、そして2 つ目は、祝福につながること(3:9-20)です。裁きの部分は、啓示の2つの部分の大部分を占めています。この判決とそれに続く祝福のモチーフは預言者全体に共通しています。ゼパニヤは、全地、ユダ、イスラエルの隣人、エルサレム、そしてすべての国々に裁きがヤハウェから下されることを明らかにしました。この本の裁きの箇所構成は円環論法的です:

- A 世界に対する裁き 1:2-3
- B ユダに対する裁き 1:4-2:3
- C イスラエルの隣国に対する裁き 2:4-15
- B' エルサレムに対する裁き 3:1-7
- A' すべての国に対する裁き 3:8

第1章も円環論法的です:

- A 普遍的な裁き 1:2-3
- B ユダに対する裁き 1:4-6

B' ユダに対する裁き 1:7-13

A' 普遍的な裁き 1:14-18

A. 世界に対する裁き 1:2-3

ゼパニヤは主の日を描いた3枚の生々しい絵を提示しました^[36]。1つ目は、壊滅的な世界規模の洪水です。

「これらの言葉は、ユダに宣告される特別な裁きについて語っているだけでなく(4節)、地上に神の王国をもたらす最終的な裁きについても語っている(黙示録19章参照)。」^[37]

1:2 ヤハウエは、地表からすべてのものを完全に取り除くことを明らかにされました(第二ペテロ3:10-12参照)。これは、旧約聖書の中で地球の完全な荒廃について最も明白に告げられたものの一つです(イザヤ24:1-6、19-23 参照)。多少の誇張が含まれているかもしれませんが、明らかに世界的な判決を予告しているようです。

「その切迫した状況とは、黒海以北の故郷を離れた野蛮なスキタイ人が西アジアを席卷しており、いつユダを襲ってくるかわからないという事実を指していると考えられる者もいる。冷酷なスキタイ人は、猛威と復讐心をもって焦土政策をとった。」^[38]

「コンピューター画面がキー入力ですべての言葉を消すように、創造物は神の臨在の画面から消えようとしている。」^[39]

「創世記の初期の章[1章から11章]の主題は、ゼパニヤ書の全3章に記載されている。」^[40]

1:3 この聖句は、2節の一般的な記述を具体的に示しています(創世記 1:1-2 および 3-31 参照)。主は動物の命を断ち切りますが、それで植物が生き残るわけではありません。動物が死んだら、間違いなく植物も死ぬでしょう。しかし、主の関心の焦点は動物の命でした。「人間および動物の生命」には、人間、あらゆる種類の獣、鳥、魚、つまり陸、空、水にいる動物の生命が含まれます。

以前の破壊、あるいはおそらく人々をつまづかせた偽りの宗教的慣行によって今も残っている遺跡は、邪悪な者たちと同様に滅びるでしょう。主はその事実を議論の余地のないものにするために人類を排除すると繰り返しました。これは天地創造の逆転でした(創世記1:20-26参照)。破壊対象として列挙される順序は、天地創造の物語に登場する順序とはまったく逆です。^[41] ゼパ

ニヤは、その範囲において洪水と同様の裁きを描写しました(創世記 6:17; 7:21-23)。

「ゼパニヤは、あまりにも驚くべき判断の言葉で始まり、私たちは彼らの前で動揺する。彼は歩み寄り、みぞおちに拳を振り、そして私たちが息を止める前に再び殴る。それは預言に対するランボーのアプローチである。」^[42]

この預言は患難時代(黙示録6-18)、あるいは千年期の終わり(第二ペテロ3:10、黙示録20:11-15)に起こる裁きについて言及しているのでしょうか?この箇所その後の裁きについての記述、特に1:2-3 と並行する箇所である 3:8 を考慮すると、これは患難時代の裁きについて言及していると思われます。^[43]

B. ユダに対する裁き 1:4-2:3

ゼパニヤは、ユダ(1:4-2:3)とエルサレム(3:1-7)の運命について、他の人類の運命(1:2-3、2:4-15、3:8)よりも詳しく述べています。このことは、来るべき裁きに関する部分でも、祝福に関する部分でも、同じでした。祝福の項では、諸国民の清めについては1節しか書かれていませんが(3:9)、イスラエルの変革については11節も書かれています(3:10-20)。

1. ユダの裁きの原因 1:4-6

1:4 ヤハウエは裁きにおいてユダとエルサレムの民に対して手を差し伸べると発表されました。

「神の裁きの対象を描く際に、外側の縁から内側の核へとらせん状に描くゼパニヤの方法論は、アモスの手法によく似ている(アモス1:6-2:16参照)。」^[44]

「手を伸ばす」とは、特別な罰の業を意味する言葉のあやです(出エジプト6:6、申命4:34、第二列王17:36、イザヤ14:26-27、エレミヤ27:5、32:17など参照)。神は、ユダ、あるいはおそらく神殿に残っているバアル崇拝者の残党(申命12:5、11; 第一列王8:29-30; エゼキエル42:13参照)と、バアルの祭司たち、ヤハウエの不忠実な祭司たちを断ち切ると約束されました。彼はまた、彼らの評判を破壊し、彼らの記憶を消し去りました(第二列王23:5、ホセア10:5参照)。

この参照は、ヨシヤがヤハウエへの崇拝を復活させ、偶像崇拝を完全に排除しようとしたが失敗に終わったため、ゼパニヤがヨシヤの改革を始めた後に書いたと一部の解釈者に示唆しています(第二歴代34:4)。他の解釈者は、ヨシヤが改革を始める前の執筆時期を議論するためにこの聖句を使用しています。^[45]しかし、この聖句は単に主がユダの偶像崇拝者たちを裁かれることを

意味しており、バアルはあらゆる偶像崇拝の象徴(シネクドーシュ)であることを意味しているのかもしれませんが。[\[46\]](#)

「宗教における興奮がそれ自体目的になっているところではどこでも、また『何が役立つか』の崇拝が『真実であること』の喜びに取って代わられているところではどこでも、バアルは崇拝される。」[\[47\]](#)

1:5 主はまた、「天の光」-太陽、月、星、惑星-を拝む者を裁きます。偶像礼拝をするイスラエルの民は、平家の屋上でそれを行っていました(申命4:19、第二列王21:3、5、23:4-5、エレミヤ19:13参照)。この迷信は今日でも星占いを信じる人々の間に根強く残っています。主はまた、ヤハウエと諸国の異教の神々の両方を崇拝するユダ人を罰するでしょう(第二列王16:3;21:6;エレミヤ32:35参照)。

ミルコム(アンモンの神モレクとしても知られている。第一列王 11:33)はおそらくすべての外国の神々を表しており、これもシネクドーシュです。今日でも、誰かが真の神を崇拝しながら、同時に神以外のものを好む場合には、シンクレティズムが存在します。神に誓うということは、神が約束したことを果たさなかった場合に、その神に宣誓者を罰するよう求める誓いを立てることを意味しました。別の神による誓いには、神がイスラエルで禁じていたその権威を認めることが含まれていました。

ミルコムは「彼らの王」を意味する「malcam」と綴られた可能性があります。元のヘブル語の形態(単語の形式)には母音が含まれていませんでした。

「... 『彼らの王』とは、民の不忠実に対する皮肉である。中途半端な形で主に正当な報酬を与えようとしていたにもかかわらず、彼らは異教の神を自分たちの主権者とみなしていた。もしミルコムが念頭にあるのなら、マルカム(『彼らの王』)はその神の名前の母音を意図的に変化させたものなので、この言及は特に効果的である。」[\[48\]](#)

「非常に多くの人々、建物に尖塔があり、その尖塔に鐘があり、オルガンがあり、結婚式のための大きな中央通路があり、正面に説教壇があり、聖歌隊用のロフトがあれば、それは教会であると考えている。でも、それは町で最悪の場所の1つであるかもしれない。それは町のどのパールーム、どのギャンブル施設、またはどの売春宿よりも悪いともいえる。これは非常に欺瞞的なものである。ユダの国を弱体化させたのは、彼らは生ける真の神に仕えているふりをしていたが、モレクの偶像崇拝に身を委ねていたのである。」[\[49\]](#)

1:6 また、背教した、つまり主を愛し従うことから離れ、主に祈るのをやめたすべての神の民に対しても裁きが下されることとなります。彼らは異教の偶像礼拝に参加しなかったとしても、もし彼らの愛が冷めていたなら、彼らは依然として罪を犯していたということです(黙示録2:1-7参照)。主は民に心から主を愛するように命じられました(申命記6:5参照)。彼らは主を忘れていたとしても、主は彼らを忘れられることはありませんでした。

「最初はヨシヤの悔い改めの呼びかけに耳を傾け、一時は主の御声に従おうとした者もいた。神の御心を知ることもなく、知ろうとしなかった者もいた。来る共通の滅びの中で、すべての者は滅びなければならぬ」。[50]

「時には、悪に積極的に関わっている人々や指導者の責任を果たせなかった人々よりも、冷淡で無関心な人々のほうが国の道徳崩壊の責任を負っていることがある。」[51]

この潜望鏡の中で預言者は、「あからさまに異教的なもの、混合主義的なもの、そして宗教的に無関心なもの」という3つのタイプの偶像崇拝を特定しました。[52] この3つすべてを実践する者は、ヤハウエから罰を受けることとなります。

イスラエル人を裁くというこの約束は、神が全地を滅ぼすという以前の預言(2-3節)とどのように調和するのでしょうか？これは預言者の未来の短縮された見方の一例であり、預言者は自分が予言したいいくつかの出来事間の時間の違いを見ることができませんでした(イザヤ61:1-3、ダニエル11:35-36などを参照)。神は紀元前586年にバビロニア人がユダを制圧しエルサレムを滅ぼしたときにイスラエルを裁きましたが、患難時代にもイスラエル人を裁きま(エレミヤ30:7、黙示録6-18ほか参照)。ゼパニヤは、ユダの民に対する神の裁きについて、神がいつ裁かれるかを正確には特定せずに説明しました。この本のこの箇所ではゼパニヤが預言したことほとんどは、少なくとも最初は紀元前586年に成就しました。

セクション1:7-18もまた、円環論法的です：

- A 主の日は近い 1:7a
- B 主はいけにえを用意された 1:7b
- B' 主の犠牲の日 1:8-13
- A' 主の大いなる日が近づいている 1:14-18

2. ユダの裁きの流れ 1:7-13

ゼパニヤの主の日の二番目の描写は、大いなる犠牲の描写です。

1:7 偶像崇拜に対する来るべき裁きの必然性と切迫性を考慮すると、ユダヤ人が主権者ヤハウエの前で「沈黙する」のは適切でした(ハバクク 2:20参照)。

「これはユダの民に対し、神の言葉と御心に対するあらゆる形の反対をやめ、従順に従い、無条件降伏し、契約の神に愛情を持って奉仕するようひれ伏すよう求める呼びかけである。」[\[53\]](#)

これがゼパニヤによる「主の日」への最初の言及であり、彼は本書の中で24回言及しています:[\[54\]](#)

裁きの時としての主の日への言及	祝福の時としての主の日への言及
主の日 1:7, 14 (2)	その日 3:11, 16
主の犠牲の日 1:8	その時 3:19, 20
その日 1:9, 10, 15	その時 3:20
その時 1:12	
主の怒りの日 1:18	
その日 2:2; 3:8	
主の怒りの日 2:2, 3	
日 1:15 (5), 16	

主の日は、人間の日とは対照的に、神が働かれる時を指します。

「預言者たちが用いたとおり、主の日は、神がご自身の栄光のために、またご自身の目的に従って、罪に対する裁き、あるいはご自身の救いのために人間の事柄に介入される時である。」[\[55\]](#)

多くの無千年王国主義者(キリストが千年間地上に統治することを否定する人々)は、主の日の宇宙的な審判がキリストの再臨のときに行われると信じています。^[56] 前千年王国主義者(キリストが地上に再臨し、その後1,000年間地上に君臨すると信じる人々)は通常、これらの宇宙的審判は将来の様々な時期に起こると信じています: 艱難時代、再臨の時、そしてキリストの地上での千年王国統治の終わりにおける現在の天地の破壊の時です。

ここで預言者は、主の日が近いこと、主が人類の歴史に介入されようとしていることを告げました(大洪水を参照)。主は、ユダといういけにえを用意され(イザヤ34:6、エレミヤ46:10参照)、それを食べるために、バビロン人という客が用意されました(エレミヤ10:25、ハバクク1:6参照)。もう一つの見解は、招かれた客とは、皮肉にもいけにえの役割を果たすことになるユダ人であったというものです。^[57]

1:8 主はユダを犠牲のように屠ったとき、王の息子たちと外国の服を着た者たちを罰しました。国の将来の支配者である王の息子たちは、土地の状況に対して特別な責任を負いました。ヨシヤの息子たちは確かにヤハウエの懲罰を受けました。エホアハズは捕虜としてエジプトに連れて行かれました(第二列王23:34)。エホヤキムはネブカドネザルに敗れ、エルサレムで亡くなりました(第二列王24:1-6)。ヨシヤの孫エホヤキンはバビロンに捕虜として捕らえられました(第二列王24:8-16)。そして、ユダを統治するヨシヤの最後の息子であるゼデキヤも盲目にされ、バビロンに捕虜として捕らえられました(第二列王24:18-25:7)。

外国の衣服を着ることは、明らかに非イスラエルの価値観への愛と支持を表明する習慣であり、それが神の怒りを招いたようです(民数記 15:38、申命記 22:11-12 参照)。^[58] 外国の衣服へのこの言及は、それを着ていた人々が隣人に対して貪欲に強奪を行っていたこと、そしておそらくは異国の衣服に関連した宗教儀式に参加していたことを暗示している可能性があります。^[59] イスラエル人の衣服は、角に紫色の糸が入った房が付いているなど、特徴的なものでなければなりません(民数記 15:38)。

1:9 主はまた、略奪しようと熱意を持って隣人の家の敷居を飛び越えたり、暴虐と欺きによって奪った贈り物で神殿を満たした者たちを罰されます。^[60] この聖句の最初の部分にある”temple”という単語は、NASBの翻訳者によって提供されました。敷居を飛び越えることについての別の見方は、この表現が建物の敷居の上を歩いた人は不幸になるという迷信を表しているというものです(第一サムエル5:5 参照)。^[61]

さらに別の見方は、この表現は隣人の家を自分の家だと主張した人々を表しているというものです。[\[62\]](#)4番目の見解は、“who avoid stepping on the threshold(敷居を踏むことを避ける者)”(NIV)という表現は、ユダ人がヤハウエ崇拜のために設けられた神殿の中庭で異教の神々を崇拝していたことを暗示しているというものです。[\[63\]](#) この箇所ですに目に映る神殿はバアル神殿かもしれません。「彼らの主[主]」は文字通り「彼らのバアル」です(4節参照)。この聖句の意味を解説するのは明らかに難しいですが、その要点は十分に明らかです。神は罪を犯した人々を罰するということです。

1:10 主がユダに裁きを下したとき、エルサレムのあちこちから、都市の完全な破壊を表す叫び声が上がりました。魚門は、漁師たちが獲物を持って街に入るときに通る門でした。それは魚市場に近いエルサレムの北壁にあった門でした(第二歴代33:14、ネヘミヤ3:3、12:39参照)。ネブカドネザルは北からエルサレムに侵入したため、おそらくこの門を通してエルサレムに入ったと思われます。この門の現代名はダマスカス門です。[\[64\]](#)

第 2 (または新) 四半期は、神殿地域の北西にあるエルサレムの地区でした(第二列王22:14、第二歴代34:22 参照)。「丘」とは、エルサレムが立っていた丘、あるいは都市を取り囲む丘、あるいはその両方を指す場合があります。いずれにせよ、バビロニア軍がエルサレムとその周辺全体を破壊したとき、エルサレムとその周囲のすべての丘に大きな衝突音を立てたことは間違いありません。

1:11 ゼパニヤは、エルサレムの市場またはビジネス地区であるモルタルの住民に、裁きが近づいているので嘆くように呼び掛けました。エルサレムのこの地域は、地理的にやや窪んだティロポイオン溪谷にあったため、モルタル(ボウル)という名前が付けられたのかもしれませんが。[\[65\]](#) 別の見方では、エルサレムは高い丘に囲まれていたため、迫撃砲はエルサレムの都市全体を指しているというものです。[\[66\]](#)

エルサレムに住んでいたカナンの人々は、死んでしまうので沈黙したでしょう。あるいは、ゼパニヤの心の中にあっただのは、カナン人と同じように振舞っていたユダヤ人だったのかもしれませんが。[\[67\]](#) 銀を量る者(商業取引を行った者)もまた都市から滅びるでしょう。

「商業は時のバアルである。巨万の富の蓄積の中で、良心とキリスト教は壁際に追いやられる。金は王であり、神(god)である。金のためなら、人間は人間的、神的なあらゆる原理を犠牲にする。貪欲は時代を支配する情熱である。他のすべてのものは、その前に倒れなければならない。」[\[68\]](#)

1:12 その時、主はエルサレムの住民を灯火を使って探すように、注意深く探します(ルカ15:8参照)。主は、主への愛がぶどう酒のように長く放置されたまま停滞し(黙示録3:15-16参照)、主は満足しておられ、行動されないと無関心に結論付けた人々を罰せられるでしょう(イザヤ32:9、エゼキエル30:9、アモス6:1参照)。彼らの自己満足が、主も同じように自己満足しておられると思わせたのです。

「今日の一般的な態度は、まさにゼパニヤの時代の人々の考え方のようだ。『主は良いことも、悪いこともしない』、つまり、神は人間の事柄において行動しない。神は祝福されることも罰されもしない。世界は『自然法則』において支配されており、神は祈りに答えられると思われる答えを与えるためにこれらの法則に干渉されることはない。神の存在はわずかながら認められているが、人間の問題に対する神の関心と活動は否定されている。」^[69]

1:13 エルサレム人と全ユダヤ人の宝物は敵の略奪品となり、破壊されなければ彼らの家は空き家になるでしょう。彼らは家を建てましたが、バビロンの侵略がすぐに来るので、そこに住むことはできませんでした。彼らはブドウ畑を植えました、同じ理由でぶどう酒を飲むことができませんでした(レビ26:32-33、申命28:30、39、アモス 5:11、ミカ 6:15 参照)。

「この一節(NEB)からも理解できるように、ゼパニヤは飲酒を非難するのではなく、無関心について非難している。」^[70]

3. ユダの裁きの差し迫りと恐怖1:14-18

ゼパニヤが描いた主の日の三番目の描写は、大規模な戦いです。

1:14 ゼパニヤは、主の大いなる日が近い、非常に近く、そしてすぐ来ると報告しました。彼の話を知る者たちは、それがヤハウエが行動される日であることを認識する必要がありました(12節参照)。その日が来ると、戦士たちは激しく叫びました。なぜなら、その日は激しい戦いが伴うからです。ユダヤ人のバビロンへの最初の移送は紀元前605年に行われ、ゼパニヤが最初にこのメッセージを告知したはずの時からそれほど年は経っていませんでした。

1:15-16 預言者は、自分の無関心な聴衆が直面する危険をさらに強く強調したかったのです。彼は、5つの同義語のペアを使って、怒りの日が人々に与える影響を説明しました。その日は、肉体的な破壊と荒廃だけでなく、精神的な悩みや苦痛を伴った注目される日となるでしょう(申命記28:53、55、57参照)。預言者はその恐怖を暗闇と暗闇、そして雲と深い闇と表現しま

した(申命記4:11参照)。トランペットと雄叫びが当時の騒乱を思い起こさせます。[\[71\]](#) ユダの要塞都市は侵略に直面し、城壁の隅にある高い塔が包囲されることとなります。

1:17 主はご自分の民を、まるで目が見えなくなったかのように手探りで歩き回るほどに、ひどく苦しめるでしょう。彼らが神に対して罪を犯したため、神はそのようなことをするのです(申命記28:28-29参照)。彼らの尊い血は塵のように地面に撒き散らされ、彼らの死んだ肉は腐敗した堆肥のように路上に横たわるでしょう。

「人間は、自分の罪を重大なもの、平凡なもの、取るに足りないものに分類するかもしれませんが。ゼパニヤ(ヤコブの手紙 2:10-11 参照)にとっては、罪という単なる事実が興奮を呼び起こし、神の怒りの重さに値するものでした。『彼らは罪を犯した』という単純な言葉は、十分なものです。」[\[72\]](#)

1:18 主が怒りを注がれたとき、ユダヤ人は苦境から抜け出すことができなかつたでしょう(エゼキエル7:19参照)。彼は、さまざまな形の偶像崇拜を好む神の民によって引き起こされた嫉妬の嫉妬の怒りの火で全地を焼き尽くすでしょう(4-6節、申命記32:21-22参照)。彼は地上のすべての住民を完全に、そしてひどく滅ぼすでしょう(2-3節参照、ヨエル2:1-11参照)。

「私が住むこの国が、友人を買い、友人を獲得し、人々に影響を与えようと、世界中で何十億ドルも費やしてきたことは、非常に興味深いことだ。しかし、今日、私たちは世界中で嫌われている一つまり愛されていないのである。愛を買うことはできない。銀や金で人々を勝ち取ることもできない。しかし、この国ではいまだに、この世のあらゆる問題は金が解決してくれると信じている。金こそがすべての問題を解決してくれると信じている。」[\[73\]](#)

この裁きの包括的な性質は、この時点で預言者の視点が再び引き上げられ、時間の経過とその後の啓示のおかげで私たちが今見ることができるものは、この預言の終末論的な成就となるであろうことを示唆しています。バビロニアの侵略はそれを予告しただけです。もう一つの可能性は、「全地」とは約束の地のみを指していると理解すべきであるということです。しかし、この本や他の本での、罪と罪人に対する神の最終的な裁きの世界的な範囲に関する他の記述は、この解釈を肯定的に捉えていません。

4. 悔い改めへの呼びかけ 2:1-3

この本のこの箇所(1:4-2:3)は、ユダヤ人たちへの、悔い改め、悔い改めなかった場合に課されるであろう罰を避けるよう訴えて終わります。

「預言者が言いたかったのは、迫りくる裁きについてのあの恐るべき描写の中で、人々を絶望に追い込むことではなく、彼らを神とその義務に駆り立てることであり、彼らを怖がらせて正気を失うことではなく、彼らの罪に恐怖心を持たせることであった。」^[74]

2:1-2 ゼパニヤは、悔い改めのために、恥知らずなユダの民に、おそらく全国規模の公の集會に集まるよう呼びかけました(1:6、ヨエル2:12-14参照)。彼らは、彼らを罰するという主の布告が発効し、主の燃えるような怒りが彼らを襲う前にそうする必要がありました。ニネベはヨナの説教を聞いて悔い改め、そして主はそれを裁くことを容赦されました。おそらく、ユダヤ人が悔い改めたなら、神も同じことをされるでしょう。裁きの日は風の前に吹く粃殻のように素早く近づいていたので、彼らは直ちに行動する必要がありました。

2:3 この聖句の招きは、この本の重要な考えを表現しています。^[75] 預言者は、主に従順であろうと努めてきた謙虚な聞き手たちに、祈りをもって主を求め続けるよう勧めました。彼は特に忠実な残りの者たちに訴えました(3:12、イザヤ11:4、アモス8:4、マタイ5:3参照)。彼らは正しい行動を追求し続け、主の声に耳を傾けて従うことによって主の主権のもとに留まる必要がありました。もし彼らがそうするなら、主は悔い改めない者たちに怒りを注がれるとき、彼らを隠すかもしれません。^[76]

「これは熱心な人にとっての希望の光であり、中途半端な人にとっての免責条項ではない。」^[77]

ここでゼパニヤは自分の名前を使って「ヤハウエに隠された」という言葉遊びをしました。ヘブル語のSatar(サタール)は、隠されたと訳される言葉の語源です。サタルはサファンと同義語であり、ゼパニヤの名前の一部である可能性があります。もしそうなら、ゼパニヤという名前はおそらく「ヤハウエによって隠された」という意味でしょう。したがって、預言者の名前は敬虔な残りの者を守るという彼のメッセージと関連していた可能性があります。

悔い改めは誰にでも開かれていました。神は確かに、バビロニア人が侵攻したとき、一部のユダヤ人を滅びから守ってくださいました(第二列王24:14-16参照)。ゼパニヤの勧めは効果があったようです。

ゼパニヤは「地の謙虚な者たち」に主を求めるよう呼びかけました。約束の地が視野にあるかもしれませんが、これはおそらく世界的な招待です。すべての人は主を求め、自分たちの罪深い道を悔い改める必要があります。

C. イスラエルの隣国に対する裁き 2:4-15

ゼパニヤは、裁きがユダだけでなく周囲の国々にも向かっていることを明らかにしました。彼はすべての国民を代表するためにユダから四方に住む国々を選びました。ペリシテはユダの西に、モアブとアンモンは東に、エチオピアは南に、アッシリアは北にありました。

「彼[神]は、遠くの国々だけでなく近くの国々も裁かれるだろう。近くの国々は略奪され、ユダに所有されるだろう。遠くの国々は主によって滅ぼされるだけである。」^[78]

ゼパニヤはユダの人々に対して、これらの国々そのものではなく、これらの国々について預言しましたが、彼らはゼパニヤの預言について聞いていたかもしれません。諸国民に関する彼の預言は、ユダヤ人に、ヤハウェが全地を統治する主権者であり、ただ単にユダだけを罰の対象として選んでいるわけではないことを思い出させました。

1. フィリスティアに来る裁き 2:4-7

2:4 預言者は、ペリシテのペンタポリスの5つの都市のうちの4つが破壊に見舞われるだろうと告知しました(イザヤ14:28-32、エレミヤ47章、エゼキエル25:15-17、アモス1:6-8参照)。彼はそれらを南から北へ列挙しました。ガトはすでに衰退していたことは明らかであり、(第二歴代26:6、アモス1:6-8、ゼカリヤ 9:5-7 参照)、あるいはおそらくゼパニヤは文学的な並行性を維持するために 4 つの町だけを選んだのかもしれませんが。^[79] より良いオプションが続きます:

「ウジヤとヒゼキヤはガトを服従させた。第二列王18:8と第二歴代 26:6」。^[80]

「ガザ」と「放棄された」はヘブル語で似ていますし、「エクロン」と「根こそぎにされた」も同様です。人々は通常、一日の中で最も暑い時間帯に休んでいるため、正午に追い出されるということは、予期せぬ時間を暗示している可能性があります。^[81]

「ガザは婚約者に捨てられた婚約者の女性のように見捨てられ、アシュケロンは夫に捨てられた妻のように荒廃し、アシュドドは離婚した女性のように追い出され、エクロンは不妊の女性のように根こそぎにされるだろう。」^[82]

2:5 ゼパニヤはペリシテ人に「災い」を告げました。ペリシテ人にも滅びが迫っていたからです。彼らは地中海の海岸に住んでおり、クレタ島から来ました(第一サムエル30:14、第二サムエル8:18、20:23、第一歴代18:17、エゼキエル25:16参照)。ヤハウェの力強い言葉だけで彼らを苦しめることができ、それは彼らに逆らうことになりました。彼は彼らと彼らの土地、カナン

の海岸平野を破壊し、もはやそこに住む人がいなくなると約束しました。エジプトのファラオ ネコ 2 世 (紀元前 609～ 594 年) は最初にこの預言を成就しました (エレミヤ47 章参照)。しかし、現在も人々がそこに住んでいるのですから、最終的な成就是将来にあるはずです。

2:6-7 平らなペリシテの海岸は過疎の牧草地となり、その洞窟(ユダとカルメル山に多くあります)は羊飼いの避難所や羊の群れの小屋として機能するでしょう。この破壊の後、ユダから生き残った人々は海岸平野を占領し、そこで羊を牧草します。彼らはまた、アシュケロンの家を引き継いで、そこを自分たちの家にするでしょう。なぜなら、主はこの残りの者たちを世話し、彼らの財産を回復してくださるからです (3:20、創世記15:18-20参照)。

「この預言は、明日には変わるかもしれないが、一年中いつでも示すことができる光景の描写である。しかし、私は、イスラエルが神のもとに最終的に帰還する前に、再びその地から追い出されると信じているので、今日そこで目にするものを預言の成就とは考えていない。」[\[83\]](#)

2. モアブとアンモンに来る裁き 2:8-11

2:8 おそらくゼパニヤがモアブとアンモンを結びつけたのは、両国ともロト(創世記19:30-38)の子孫であり、ユダの東に位置していたからでしょう。どちらの国もイスラエルの民を嘲り、ののしりました。彼らは繰り返し、神に選ばれた民の敵として高ぶっていました(民数22:12-14、24:17、士師3:12-14、10:7-9、11:4-6、第一サムエル11:1-11; 第二サムエル10:1-14; 第二列王3章)。

2:9 主はご自身で「わたしが生きている」と誓った

「生命は特別に神のものである、なぜならば神のみが全ての命の源だからだ。」[\[84\]](#)

イスラエルの神、全能のヤハウェは、イスラエル人に対する敵意のゆえに、ソドムとゴモラを滅ぼされたように、これらの国々を必ず滅ぼされます(イザヤ15-16、エレミヤ48:1-49:22、エゼキエル25:1-14、35、アモス1:11-2:3参照)。神は、後にモアブの領土となるこれらの都市を、これらの国が誕生する少し前に完全に滅ぼされました(創世記19:23-29)。

ソドムとゴモラは悪名高く永遠に荒廃した、雑草しか生えない塩田の場所となっていました(エレミヤ48:9参照)。そして、ヤハウェはモアブとアンモンについてそう判断するでしょう。イスラエル人の残りの者は、神からの相続物として、これらの隣人を略奪し、その領土を乗っ取るでしょう(イザヤ11:14参照)。

2:10 軍の主ヤハウエは、これらの国々の誇りと神の民イスラエルに対する傲慢な嘲笑のゆえに、このような運命をもたらすでしょう(イザヤ16:6、エレミヤ48:26、29、エゼキエル25:5-6、8参照)。

「これらの土地にかかっている呪いは、地上に神の王国が完成するまで完全に取り除かれることはない。この見解は、預言者が南と北の国々に対する裁きの告知に移る11節の内容によって、正しいことが証明されている。」^[85]

2:11 主はモアブとアンモンを恐れさせるでしょう。彼らがもはや異教の神々に犠牲を捧げることができないようにするために神はこれらの国々の住民を地上から排除します。その結果、これらの神々は「飢える」こととなります。それを維持するために定命の者たちの犠牲を必要とする神とはどのようなものでしょうか？そして、世界の海岸地帯に住んでいるように描かれているすべての国の人々がヤハウエを崇拝することになります(マラキ 1:11 参照)。

「これらの預言が最終的に成就するのは、私たちの時代のまだ先のことであることが、8節から10節と11節とのつながりから分かる。」^[86]

「神の裁きの目的についてこのように述べた後、ゼパニヤは異教世界全体が裁きに屈することを証明するために、例として他の二つの強力な異教国家を挙げている。」^[87]

3. エチオピアに来る裁き 2:12

エチオピアに対するゼパニヤの神託は非常に短いものです(イザヤ18-20章、エレミヤ 46章、エゼキエル書 29-32章参照)。パターソンは、ゼパニヤはエチオピアではなくエジプトを意味していたのではないかと示唆しました。^[88] 聖書のエチオピアは、現在エジプト南部、スーダン、エリトリア、エチオピア北部が保持している領土を占領しました。ゼパニヤの時代のエチオピア人は、ユダヤ人に知られている最南端(実際には最南西)の人々でした。神はこの国に対して「剣」を送ると約束しました。彼の裁きの道具は、紀元前586年にユダ全土を制圧した直後にエチオピアを破ったネブカドネザルであることが判明しました。(エゼキエル 30:4-5、9、24-25参照)。預言者はこの打倒の理由を何も述べていませんが、エチオピアもヤハウエを非難した他の国々が示したのと同じように、ヤハウエを無視していたからに違いありません。

4. アッシリアに来る裁き 2:13-15

2:13 ゼパニヤはまた、ユダの北(実際には北東)にあるアッシリアとその首都ニネベの滅びを預言しました(イザヤ14:24-27; ナホム書参照)。ニネベは紀元前612年にバビロニア、メディア、スキタイの連合軍によって陥落したため、ゼパニヤはその日より前にこの預言を述べたに違いありません。主

はニネベを荒れ果てた地としました(ナホム3章参照)。ニネベが陥落するまでは、ニネベには多くの水が周囲にあり、その中を循環していましたが、未来には干上がるでしょう(ナホム1:8, 2:6, 8 参照)。

「ニネベは聖書の早期警戒システムの一部である。」[\[89\]](#)

2:14 美しいニネベは、多くの洗練された市民が住むのではなく、野生動物や鳥の住処となりました。ニネベは古代近東最大の都市だったため、ゼパニヤの時代にはその考え自体が信じ難く思えたに違いありません。[\[90\]](#)

「全体のイメージは、創造物の秩序の逆転を描いている。人類は元々、創造物全体を支配する責任を与えられていた。しかし今、創造物は人類最大の帝国から権力を掌握し、それを獣のような荒野に変えている。組織化された混乱は、文明に取って代わられた。」[\[91\]](#)

2:15 ゼパニヤの時代、ニネベは誇り高く、のんきで、難攻不落だったようです。その住民は世界で最も重要な都市の市民であることを誇っていました(イザヤ10:12参照)。しかし将来的には、ここは男爵ではなく獣たちの荒涼とした休息地となりました。通行人はニネベの誇りを口頭で罵ったり、崩壊後は拳を振りかざしたりして嘲笑しました(ナホム3:19参照)。

モティアはゼパニヤがこのセクションで教えた5つの原則を要約しました (2:4-15)。まず、主は全地の神であること。第二に、主は世界の霊的な必要を計画しておられること。第三に、主は歴史的過程全体を統括しておられること。第四に、主の民は主の世界目的の中心であること。そして第五に、主は高慢に対して激しい敵であることです。[\[92\]](#)

D. エルサレムに対する裁き 3:1-7

ユダ周辺の国々に神の裁きが下されることを告知した後(2:4-15)、預言者はご自身の選ばれた民に対するヤハウエの裁きの主題に戻りました(1:4-2:3参照)が、今回は特にエルサレムに焦点を当てました。彼はエルサレムの名前には言及しませんでした、それは明らかに視野に入っています。

「イザヤやミカと同じように、彼は都市の預言者であり、その欠点には目を開いているが、彼らとは異なり、彼の焦点はほぼ完全に市民的かつ宗教的である。しかし、その根拠が何であれ、彼は同じ場所に基本的な境界線を引いている。世界が裁かれ、神の民も啓示された真理から背き(アモス2:4)、与えられた霊的特権を無視したことで裁かれる(イザヤ65:2)。アモスと同様、ゼパニヤも周囲の国々を非難する修辭的手段を用いているが、その間ずっと、彼の話の聞いている人たちには知らされずに、彼ら自身の非難がますます近づいているのである。」[\[93\]](#)

3:1 ゼパニヤは、今度はエルサレムについて、別の「わざわい」を宣言しました(2:5参照)。エルサレムは反抗的で、汚れていて、抑圧的であると彼は説明しました。反逆者とは神の御心に従うことを拒否する人々です。汚れた者とは、罪深い行為によって汚がれた者たちです。抑圧者は他人、特に自分が利用できる人の権利を無視する人です。

「エルサレムの罪は三重である。積極的に神に反抗し、罪によって内的に汚され、人に残酷である。だから、エルサレムは、神に対して、人間に対して、1)反逆的で、2)汚れに満ち、3)暴虐的に、完全に悪に傾いている。」[\[94\]](#)

3:2 エルサレムの人々がヤハウェに対して反抗的であったことを示す 4 つの証拠がありました(1 節): 彼らは神が遣わした預言者に無反応であったこと。彼らは教える余地を与えず、いかなる矯正も受け入れることを拒否したこと。彼らがヤハウェを信仰していなかったこと。そして、彼らは悔い改めと祈りによって神に近づくことをしなかったこと、です。(1:6参照)。

「ここでヤハウェは、砕かれた心を持った父親である。生涯の愛、つまり自分の娘が彼を徹底的に拒んだのだ。」[\[95\]](#)

「神と私たちの実際的な関係は、『自分を信じず、神を信頼しなさい』という言葉に要約されている。人間はこれを逆転させ、『自己信頼』が当然なことに失敗したとき、『神を疑う』のだ。」[\[96\]](#)

3:3 エルサレム人が弱者を虐げていた証拠に(1節)、この町の市民指導者たちの貪欲な行動があります。凶暴な獅子や狼のように、彼らは弱い立場の人々の財産を、できる限りの速さで食い尽くしました(1:8、エゼキエル3:9-10、ミカ2:1-3、9-10参照)。

3:4 エルサレムの宗教指導者、(偽)預言者や祭司たちは、エルサレムの汚れた状態の例を示しました(1節)。預言者たちは、自らの助言を神の啓示として発表したという点で無謀であり、人々を欺いて自分たちの言葉が権威あるものであるかのように信じ込ませたという点で不誠実でした。祭司たちは神が礼拝のために定めた聖さの律法を守らず、自分たちの目的に合わせてモーセの律法の意味を曲解しました(1:4-5参照)。

3:5 これらの曲がった指導者たちとは対照的に、ヤハウェは正当であり、まだエルサレムにおられました。彼は、民間指導者や宗教指導者たちが行ったような不当なことはしませんでした。彼は日の出のように日々忠実に正義を示しました(申命記32:4参照)。しかし、エルサレムの不当な指導者

私たちは、自分たちが一貫して行ってきた不正を恥じることはありませんでした。

3:6 主はエルサレム人に、すでに他の国々を滅ぼしたことを思い出させました。これはおそらく、神がすでにアッシリアの手に落ちることを許したユダ周辺の国々を指しているのでしょう。彼はそのような没落した国家を、敵の破壊により今や廃墟となった強力な隅の塔を持つ都市に喩えました。この代表的な都市の街路も閑散としていました。すでに敗戦した国々の現実の都市は廃墟と化し、住民はいませんでした。サマリアもそのような都市の一つであり、旧北王国の数多くの町もそのような都市でした。

3:7 主はエルサレムの民が北王国と他の滅びた国々の運命から学ぶことを期待されました。神は破壊の背後にいますから、彼らは神を尊重し、神の言葉に従うべきです。彼らは、神が脅迫したように、同じように彼らを裁かないように、そうすべきでした。しかし彼らは、罪深い自堕落を追求し、その行為において徹底的に堕落することのほうを求めていたのです。

「罪の誘惑は大きく、それが受ける罰も大きいですが、それにもかかわらず、人は真っ向から罪に突き進むのだ。」[\[97\]](#)

E. すべての国に対する裁き 3:8

エルサレムの人々はもう少し待つ必要がありました。主は間もなく、貪り食う動物のように立ち上がり、獲物を食べ尽くされるでしょう。イエスはユダを含む邪悪な国々や王国を集め、彼らに燃えるような怒り、憤り、怒りを注ぐことを決意していました。ヤハウエの燃えるような熱意がすべての国々を飲み込むでしょう。世界は再び完全に腐敗するからです(ノアの時代に起こったように、創世記6:5-7;ゼパニヤ1:2-3参照)。

「要するに、謙虚な者は裁きを辛抱強く待つべきである。なぜならそれは神の回復計画の第一段階だからである。」[\[98\]](#)

チャールズ・フェインバーグによると、これは旧約聖書の中でヘブル語のアルファベットのすべてが含まれている唯一の聖句です。[\[99\]](#)

「ゼパニヤ書は、フロリダのハリケーン、テキサスの竜巻、ミシシッピ川の洪水、ミネソタの吹雪、カリフォルニアの地震がすべてひとつにまとめられたようなものである。」

[\[100\]](#)

世界は今も主がすべての国々に怒りを注がれるのを待っています。神はまだそうしておられません。神は忍耐強く、人々に悔い改める時間を与えておられるからです(第二ペテロ3:9参照)。しかし、その日は必ず来ます(第二ペテロ3:10)。その到来を考慮して、クリスチャンは行動において聖であり、性質において敬虔であり、その日を待ち望み、それを急ぐ必要がある

ります(祈りと説教によって、第二ペテロ3:11)。ここで預言されている地上における神の怒りの大いなる噴出は、私たちの主イエス・キリストが御国を設立するために再臨される前の患難時代に起こるでしょう(2:2、ゼカリヤ14:2、黙示録16:14、16参照)。

ゼパニヤは世界中の国々の滅亡について最後に言及し(8節)、彼の預言の裁きに関する部分(1:2-3:8)が一周することになります。この本のこの箇所の大環論法的な構造に注目してください:

- A 世界に対する裁き 1:2-3
- B ユダに対する裁き 1:4-2:3
- C イスラエルの隣国に対する裁き 2:4-15
- B' エルサレムに対する裁き 3:1-7
- A' すべての国に対する裁き 3:8

III. ヤハウェの祝福の日 3:9-20

来たるべき日の世界に対する神の裁きに関する啓示を終えたゼパニヤは(1:2-3:8)、今度はその裁きの後にヤハウェが全人類に大きな祝福をもたらすであろうと告知しました(3:9-20)。裁きの書の部分と同様に、彼は最初に異邦人の国々に対する神の計画を簡単に明らかにし、次にイスラエルに対する神の計画について広範囲に語りました。

「以下では、裁きの目的と成果が示されており、これが救いの告知への序章となっている。」[\[101\]](#)

「なぜ預言者たちは一貫して希望のメッセージで書物を閉じたのだろうか?少なくとも3つの理由がある。まず、希望は従順の大きな動機であり、預言者は神の民に神の御心に従い、神の命令を行うよう奨励したかったのである。神の契約の祝福は、神の民が神の契約の条件に従った場合にのみ与えられる。

「第二の理由は、預言者が神の忠実さを強調していることである。主は約束を守り、いつか王国を確立する。そして神は忠実に約束を守るので、私たちは神の言葉に忠実に従うべきである…

「最後に、最後の希望のメッセージは、神に忠実であり、神への献身ゆえに苦しんでいたこの地の忠実な残りの者たちへの励ましだった。他人に何を言われてもされても、神に、そしてみことばに忠実な『献身的な者の仲間』に属することは難しい。神がいつの日か敵に勝利し、正義を貫かれることを知っていることは主誠実に歩んでいる残りの信者にとって励ましである。」[\[102\]](#)

A. 国々の浄化 3:9

「その後」は、ゼパニヤの預言の焦点と同様に、時代の大きな変化を示しています。これは、患難時代の裁きから千年王国の祝福への移行として機能する蝶番の言葉です。そして、これらの裁きの後(1:2-3:8)、主は世の人々に、嘘や汚れた言葉ではなく、真実と恵みを語る清められた唇を与えると約束されました(イザヤ6:5-7参照)。

「唇は言語を表すのではなく、人間が心の考えを表現する言語器官として言及されているため、唇の純粹さは心の浄化を伴うか、それを前提とする。」^[103]

ヤハウエは世界中のすべての人々のこの変化に影響を与え、人々が主を崇拜し(創世記4:26参照)、国家の一つの団結した家族として主に仕えるようになるでしょう。この出来事はバベルの逆転とみなされています(創世記11:1、6-7、9)。^[104]この啓示は、千年王国の初めに地上に住んでいるすべての人がイエス・キリストを信じることになることを示しています(マタイ25:31-46参照)。

B. イスラエルの変容 3:10-20

ゼパニヤは、世界的な懲罰期間の後に主がイスラエルのために何をなさるかについて、さらに多くの啓示を主から受けていました。この箇所も思考構造が円環論法的です：

- A イスラエルの浄化 3:10-13
- B イスラエルとヤハウエの喜び 3:14-17
- A' イスラエルの再集結 3:18-20

1. イスラエルの浄化 3:10-13

3:10 離散した主の子孫であるユダヤ人は、地の果てから主に礼拝の捧げ物を持ってくるでしょう。「エチオピアの川」とはおそらくナイル川とその支流(アトバラ川、アスタソバス川、青ナイル川、白ナイル川)のことです。^[105]これらの「川」は預言者の時代には既知の世界の端にありました(2:12参照)。この意味するところは、ユダヤ人たちがエルサレムに来るということです。エルサレムは、主がご自分の民の間で住む場所として選ばれた都市です(申命記30:1-10、イザヤ66:18、20参照)。

「私たちは他の人たちに対して、『私の嘆願者たち、たとえ散らされた娘でさえも』という言葉の主語ではなく動詞の目的語として理解することを好む。言い換えれば、エチオピアに散り散りになった主の民は、主への捧げ物として異邦人によって祖国に連れて行かれるということである。」^[106]

「したがって、その意味は次のとおりである。異教徒の国々の最も離れた国々は、散り散りになった神の国民の成員をエホバのもとに連れてくることによって、あるいは彼らを生ける神に改宗させることによって、自分たちがエホバの崇拝者であることを証明するだろう。」[\[107\]](#)

3:11 「その日」、裁きの日が続く祝福の日には、ゼパニヤの聞き手であるユダヤ人は、これまでの主に対するすべての反逆をもはや恥じることはなくなるでしょう。なぜなら、神は彼らの心から高慢さをすべて取り除いてくださるからです(エゼキエル20:34-38、マタイ25:1-13参照)。彼らは、聖なる山エルサレムで主に対して傲慢になって再び高ぶることは決してありません(詩篇2:6;ダニエル9:16;ヨエル2:1;オバデヤ16;他)。恥の感情は罪の意識から生まれますが、これらのユダヤ人は高慢にならずへり下るために、もはや罪の意識を感じることはありません。

「会衆は好意を回復され、主によってあらゆる罪深いことから清められ、聖化されるだろう。」[\[108\]](#)

3:12 その日のイスラエル人は謙虚で心のへりくだった者となり(2:3参照)、主から偶像や自己高揚に向かうのではなく、主を避け所として求めるようになるでしょう。主を求めることは謙虚さの表れですが、祈らないことによってさえ主を見捨てることは神からの独立の精神を表します(1:6参照)。ここでも、「ヤハウエに隠された」ゼパニヤの名前が現れます。神はご自分の民をかくまわれます。主は彼らの避け所となり、彼らは神に身を避けます。これは患難時代に封印された144,000人のイスラエル人の特徴です(黙示録7:1-8; 14:1-5)。[\[109\]](#)

「神の望みは人間を蒸発させる(消滅させる)ことではなく、人間を神の御前で生きられるようにすることである。」[\[110\]](#)

3:13 出エジプト以来の彼らの行動とは対照的に、ユダヤ人は決して悪いことをせず、嘘をつき、欺きを行いません(3:1-4参照)。彼らは、何も邪魔されることなく草を食べ、横たわり、平和に過ごしている羊の群れに似ています(詩篇23章、ミカ4:4参照)。

「創造主が崇拝され、あるべき姿で仕えられるとき、パラダイスは取り戻される。」[\[111\]](#)

2. **イスラエルとヤハウエの喜び 3:14-17**

「聖書のどこにでも見られる、裁きにおける神の怒りに関する最も恐ろしい描写の一つが、ゼパニヤの冒頭の節に現れている。全宇宙は彼の燃えるような怒りで焼き尽くされるであろう。創造の秩序そのものが覆されるであろう。聖書のどこにでも見られ

る、神の民に対する神の愛についての最も感動的な描写は、ゼパニヤ書の最後の一節に現れている。神とその民は、理解できないほどの高い愛の歓喜を手に入れるのだ。』[\[112\]](#)

「罪を取り除くという約束の次には、問題を取り除くという約束が続く。なぜなら、原因がなくなれば、結果はなくなるからである。』[\[113\]](#)

ゼパニヤはこの救いに対する喜びの詩篇を別の視交錯として編曲しました：

- ”A シオンが歌う (3:14a)
- B イスラエルの叫び (3:14b)
- C エルサレムの喜び (3:14c)
- D ヤハウェの救出(3:15a, b)
- E 王ヤハウェの臨在 (3:15c)
- F もう恐怖はない (3:15d)
- G エルサレムの未来のメッセージ (3:16a)
- F’ もう恐怖はない (3:16b, c)
- E’ 神ヤハウェの臨在(3:17a)
- D’ 力強い救出者 (3:17b)
- C’ 神の喜び (3:17c)
- B’ ヤハウェの沈黙 (3:17d)
- A’ ヤハウェの歌 (3:17e)”[\[114\]](#)

3:14 ゼパニヤは、イスラエルの清めに関するこれらの素晴らしい見通し(10-13節)を考慮して、エルサレムの人々とすべてのイスラエル人に、心から喜びの叫びをあげるよう呼びかけました(エレミヤ33章、イザヤ40-66節参照)。

「この命令は将来のエルサレムに向けられているが、ゼパニヤの時代の敬虔な崇拝者たちにとってそのメッセージが失われることはないだろう。』[\[115\]](#)

「の娘」という表現は、シオン(エルサレム)の市民をその都市の子供たちとして指す比喩的な方法です。どの都市で生まれた子供も、比喩的な意味ではその都市の子供であると同時に、文字通りの意味での物理的な親の子供でもあります。他の場所では、「エルサレムの娘たち」は、エルサレムの周囲の村々、つまりエルサレムが生み出した小さなコミュニティを指すこともあります。しかし、ここでゼパニヤはおそらく、エルサレムに娘がいたということではなく、エルサレムがヤハウエの娘であるということを書いたかったのでしょう。

[116]

3:15 喜ぶ理由とは、主がご自分の裁きとイスラエルの敵をエルサレムの臨在と生活から取り除いてくださるからです(8、19節参照)。イスラエルの真の全能の王ヤハウエは、その民のただ中におられます(千年王国の間、メシアであるイエス・キリストの姿で;17節;イザヤ9:7;44:6;ゼカリヤ14:9参照)。その結果、彼らはもはや災いを恐れなくなります(13節)。

3:16-17 「裁きの日の悲痛な叫び声(1:14)は、二人の恋人の再会の感動的な静寂に取って代わられるであろう。」[117]

祝福の「その日」には、エルサレムの人々には恐れられない理由がたくさんあるでしょう。その理由の一つは、彼らの神ヤハウエが彼らのただ中におられるからです(15節)。彼は世界中のすべての敵とすべての反対者を打ち破り、勝利の戦士となるでしょう(1:2-3;3:8)。神は花婿のように、ご自分の民であるイスラエルを喜び、彼らは自分の花嫁としての神の愛の守りの中で静かに休むでしょう(申命記28:63、30:9参照)。主はご自分の愛するイスラエルに対して喜びの声さえ叫ばれるでしょう。この擬人化(人間の言葉で神を描写したもの)は、この時に主がご自分の民を受け入れる大きな喜びを強調しています。

「ここで、預言者は、民に対する神の愛を熱狂的に描写することによって『至聖所』に入る。この節[17節]は旧約聖書のヨハネ3:16である。」

[118]

「これは神の言葉の中で最も驚くべき文書の一つに違いない。」[119]

「ほとんどの場合、主の愛はヘブライ語のヘセド(hesed)で表現される。これは献身的に発せられる愛であり、愛の『永遠に絶えることのない』忠実さ、心の中にだけでなく意志の中に生きる愛である。しかし、ここでの言葉はアハバ(ahaba)、ヤコブのラケルに対する熱烈な愛(創世記29:20)、ミカルのダビデに対する情熱(第一サムエル18:28)、ヤコブのヨセフに対する熱烈な愛(創世記37:3)、ウジヤの園芸への献身(第二歴代26:10)、ヨナタンとダビデとの深い友情(第一サムエル18:3)、主の律法に対する献身者の喜び(詩篇119:97)である。これも

主の民に対する愛であり(ホセア3:1)、主を喜ばせる愛であり(ゼパニヤ3:17c)、言葉のない崇拜をもって愛する人を思い巡らせる(17節)、抑えきれず高らかに歌い出す愛(17節e)である。』[\[120\]](#)

「神の力、神の救い、そして神の愛に焦点を合わせれば、困難な時にも希望を見つけることができる。神は私たちの王であり(3:15)、救い主であり(3:16-17a)、そして私たちの最愛者である(3:17b)。』[\[121\]](#)

3. イスラエルの再集結 3:18-20

3:18 かつて、エルサレムから遠く離れて住んでいたユダヤ人たちは、イスラエルの毎年恒例の祭りを観察するためにエルサレムに行くことができず、とても悲しんでいました。彼らはまた、エルサレムから遠く離れて住んでいることで、同胞のユダヤ人の一部からある批判を受けました。しかし、この祝福の時(千年王国)には、主は彼らが祭りを祝うためにエルサレムに旅行に行けるようにしてください。千年期のイスラエルの祝日は、旧約が定めたものとは多少異なりますが、千年期にはエルサレムで毎年恒例の祝日が行われます(エゼキエル書45:9-46:24参照)。

「なぜ主は、今や成就した宗教的実践を復活させようとするのだろうか？おそらく、イエス・キリストによる救いの教義の意味をイスラエルに教えるためだろう。』[\[122\]](#)

3:19-20 ユダヤ人の抑圧者たちを扱った後(8-15節、2:4-15節、創世記12:3参照)、主は弱い者(「足を引きずっている者」)や散らされた者(「軽蔑されている者」)さえ救い出してください。そして神は彼らに善良さについて国々の上に名声を与えるでしょう(申命記26:19参照)。神は彼らを彼らの地に集め、彼らの運命を回復されるとき、彼らに栄誉ある名を与えられるでしょう(15節、創世記12:1-7、13:14-17、15:7-21、17:7-8;申命記 26:19; 第二サムエル 7:16; 詩篇 89:3-4; イザヤ 9:6-7; ダニエル 7:27参照)。

「神の民がこの地上で受ける裁きが当然であるとしても、苦しみは継続的に経験する必要はない。』[\[123\]](#)

ゼパニヤは、自分が発表したことはヤハウェの宣言であると断言して著書を締めくくりました。神は確かにご自分の民を回復されるでしょう。

「ゼパニヤのメッセージ全体は、最終的に、正しく思いやりのあるイスラエルの契約の神ヤハウェで始まり、また締めくくられ、その言葉(1:1)が語られる(3:20)という点で、一つの壮大な包含に統一されている。』[\[124\]](#)

インクルージオとは、文学単位の最初と最後に重要な要素(単語またはモチーフ)を繰り返すことであり、いわばブックエンドの役割を果たします。

「ゼパニヤ書の重要な思想は、どの節に表されているかというよりも、最初の節と最後の節の対比に表れている。上書きの後、最初の言葉は『わたしは完全に焼き尽くす』である。これは裁きの激しい炎である。しかし、この書の最後の言葉は、『わたしはあなたに名誉を与え、ほめ歌う』である。これは祝福の最終的な充満である。……このように、ゼパニヤ書の重要な思想は、『裁きを経て祝福に至る』であると言うことができる」。[\[125\]](#)

NASB の 18 節から 20 節にかけて、主は 8 回“I will(わたしは～する(意思))” “I am going to(わたしは～をする、(その方向にすでに向かっている状態))” または “When I(わたしは～するとき)”と言われました。将来の世界におけるイスラエルの回復と祝福は、ヤハウエご自身が「その日」(つまり、主の日)に成し遂げられるものです。神以外の誰もそれを達成することはできませんし、神以外の誰もそれを達成しようとはしません。しかし神こそがそれを成就させるでしょう!

Bibliography

- Allen, Ronald B. *A Shelter in the Fury: A Prophet's Stunning Picture of God*. Portland: Multnomah Press, 1986.
- Baker, David W. *Nahum, Habakkuk and Zephaniah: An Introduction and Commentary*. Tyndale Old Testament Commentaries series. Leicester, Eng., and Downers Grove, Ill.: Inter-Varsity Press, 1988.
- Baxter, J. Sidlow. *Explore the Book*. 1960. One vol. ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.
- Berlin, Adele. *Zephaniah*. The Anchor Yale Bible series. New Haven and London: Yale University Press, 2008.
- Bramer, Stephen J. "Suffering in the Writing Prophets (Isaiah to Malachi)." In *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and the Church*, pp. 147–59. Edited by Larry J. Waters and Roy B. Zuck. Wheaton: Crossway, 2011.
- Bright, John. *A History of Israel*. Philadelphia: Westminster Press, 1959.
- Chisholm, Robert B., Jr. *Handbook on the Prophets*. Grand Rapids: Baker Book House, 2002.
- _____. *Interpreting the Minor Prophets*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1990.
- _____. "A Theology of the Minor Prophets." In *A Biblical Theology of the Old Testament*, pp. 397–433. Edited by Roy B. Zuck. Chicago: Moody Press, 1991.
- Christensen, Duane L. "Zephaniah 2:4–15: A Theological Basis for Josiah's Program of Political Expansion." *Catholic Biblical Quarterly* 46 (1984):669–82.
- Craigie, Peter C. *Twelve Prophets*. 2 vols. Philadelphia: Westminster Press, 1985.
- Darby, John Nelson. *Synopsis of the Books of the Bible*. Revised ed. 5 vols. New York: Loizeaux Brothers Publishers, 1942.
- DeRoche, M. "Zephaniah 1:2, 3: The 'Sweeping' of Creation." *Vetus Testamentum* 30 (1979):104–9.

Dyer, Charles H., and Eugene H. Merrill. *The Old Testament Explorer*. Nashville: Word Publishing, 2001. Reissued as *Nelson's Old Testament Survey*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 2001.

Eichrodt, Walther. *Theology of the Old Testament*. 5th ed. revised. 2 vols. Translated by John A. Baker. The Old Testament Library series. Philadelphia: Westminster Press, 1961 and 1967.

Feinberg, Charles Lee. *Habakkuk, Zephaniah, Haggai, Malachi*. The Major Messages of the Minor Prophets series. New York: American Board of Missions to the Jews, 1951.

Gaebelein, Arno C. *The Annotated Bible*. 4 vols. Reprint ed. Chicago: Moody Press, and New York: Loizeaux Brothers, 1970.

Hanke, H. A. "Zephaniah." In *The Wycliffe Bible Commentary*, pp. 883–88. Edited by Charles F. Pfeiffer and Everett F. Harrison. Chicago: Moody Press, 1962.

Hanna, Kenneth G. *From Moses to Malachi: Exploring the Old Testament*. 2nd ed. Edited by Roy B. Zuck. Bloomington, Ind.: CrossBooks, 2014.

Hannah, John D. "Zephaniah." In *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, pp. 1523–35. Edited by John F. Walvoord and Roy B. Zuck. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1985.

Henry, Matthew. *Commentary on the Whole Bible*. Edited by Leslie F. Church. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1961.

The Holy Bible: New International Version. Colorado Springs, et al.: International Bible Society, 1984.

Ironside, Harry A. *Notes on the Minor Prophets*. New York: Loizeaux Brothers, 1947.

Jacob, Edmond. *Theology of the Old Testament*. Translated by Arthur W. Heathcote and Philip J. Allcock. New York and Evanston, Ill.: Harper & Row, 1958.

Jamieson, Robert; A. R. Fausset; and David Brown. *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1961.

Kaiser, Walter C., Jr. *Toward an Old Testament Theology*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1978.

Keil, Carl Friedrich. *The Twelve Minor Prophets*. 2 vols. Translated by James Martin. Biblical Commentary on the Old Testament. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1949.

Laetsch, T. *The Minor Prophets*. St. Louis: Concordia Publishing House, 1956.

Longman, Tremper, III and Raymond B. Dillard. *An Introduction to the Old Testament*. 2nd ed. Grand Rapids: Zondervan, 2006.

McGee, J. Vernon. *Thru the Bible with J. Vernon McGee*. 5 vols. Pasadena, Calif.: Thru The Bible Radio; and Nashville: Thomas Nelson, Inc., 1983.

Morgan, G. Campbell. *An Exposition of the Whole Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Co., 1959.

_____. *Living Messages of the Books of the Bible*. 2 vols. New York: Fleming H. Revell Co., 1912.

_____. *The Unfolding Message of the Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Co., 1961.

Motyer, J. Alec. "Zephaniah." In *The Minor Prophets: An Exegetical and Expositional Commentary*, 3:897–962. 3 vols. Edited by Thomas Edward McComiskey. Grand Rapids: Baker Books, 1992, 1993, and 1998.

The Nelson Study Bible. Edited by Earl D. Radmacher. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997.

The New American Standard Bible. La Habra, Cal.: The Lockman Foundation, 2020.

The New English Bible with the Apocrypha. N.c.: Oxford University Press and Cambridge University Press. 1970.

Patterson, Richard D. *Nahum, Habakkuk, Zephaniah*. Wycliffe Exegetical Commentary series. Chicago: Moody Press, 1991.

Payne, J. Barton. *The Theology of the Older Testament*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1962.

Poythress, Vern S. "Dispensing with Merely Human Meaning: Gains and Losses from Focusing on the Human Author, Illustrated by Zephaniah 1:2–3." *Journal of the Evangelical Theological Society* 57:3 (September 2014):481–99.

Price, J. Randall. "Old Testament Tribulation Terms." In *When the Trumpet Sounds*, pp. 57–83. Edited by Thomas Ice and Timothy Demy. Eugene, Oreg.: Harvest House Publishers, 1995.

Pusey, E. B. *The Minor Prophets*. Barnes on the Old Testament series. 2 vols. Reprint ed. Grand Rapids: Baker Book House, 1973.

Robertson, O. Palmer. *The Books of Nahum, Habakkuk, and Zephaniah*. New International Commentaries on the Old Testament series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1990.

Robinson, George L. *The Twelve Minor Prophets*. N.c.: Harper & Brothers, 1926; reprint ed., Grand Rapids: Baker Book House, 1974.

Smith, George Adam. *The Book of the Twelve Prophets Commonly Called the Minor*. 2 vols. Vol. 1: 10th ed. Vol. 2: 7th ed. The Expositor's Bible. Edited by W. Robertson Nicoll. London: Hodder and Stoughton, 1903.

Smith, John M. P. *A Critical and Exegetical Commentary on Zephaniah and Nahum*, International Critical Commentaries series. Edinburgh: T. & T. Clark, 1911.

Smith, Ralph L. *Micah–Malachi*. Word Biblical Commentary series. Waco, Tex.: Word Books, Publisher, 1984.

Swindoll, Charles R. *The Swindoll Study Bible*. Carol Stream, Ill.: Tyndale House Publishers, 2017.

Swindoll, Charles R., John F. Walvoord, J. Dwight Pentecost, et al. *The Road to Armageddon*. Nashville: Word Publishing, 1999.

Tolentino, Gerielito. "Zephaniah." In *Surveying the Old Testament Prophetic Books*, pp. 365–76. Learn the Word Bible Survey series. Edited by Paul D. Weaver. N.c.: Learn the Word Publishing, 2021.

von Rad, Gerhard. *Old Testament Theology*. 2 vols. Translated by D. M. G. Stalker. New York and Evanston, Ill.: Harper & Row, 1962 and 1965.

Walker, Larry Lee. "Zephaniah." In *Daniel–Minor Prophets*. Vol. 7 of *The Expositor's Bible Commentary*. 12 vols. Edited by Frank E. Gaebelein and Richard P. Polcyn. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1985.

Waltke, Bruce K. *An Old Testament Theology*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 2007.

Wiersbe, Warren W. "Zephaniah." In *The Bible Exposition Commentary/Prophets*, pp. 425–36. Colorado Springs, Colo.: Cook Communications Ministries; and Eastbourne, England: Kingsway Communications Ltd., 2002.

Wilson, M. R. "Nineveh." In *Major Cities of the Biblical World*. Edited by R. K. Harrison. Nashville: Thomas Nelson, 1985.

Wood, Leon J. *The Prophets of Israel*. Grand Rapids: Baker Book House, 1979.

_____. *A Survey of Israel's History*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1970.

[1] Cf. Ronald B. Allen, *A Shelter in the Fury*, p. 20.

[2] See Vern S. Poythress, "Dispensing with Merely Human Meaning: Gains and Losses from Focusing on the Human Author, Illustrated by Zephaniah 1:2–3," *Journal of the Evangelical Theological Society* 57:3 (September 2014):481–99.

[3] For further discussion of the book's unity, see Richard D. Patterson, *Nahum, Habakkuk, Zephaniah*, pp. 290–92.

[4] E.g., *ibid.*, p. 276; E. B. Pusey, *The Minor Prophets*, 2:226; H. A. Hanke, "Zephaniah," in *The Wycliffe Bible Commentary*, p. 883; David W. Baker, *Nahum, Habakkuk and Zephaniah*, p. 91; Leon J. Wood, *The Prophets of Israel*, p. 320; Bruce K. Waltke, *An Old Testament Theology*, p. 839; George L. Robinson, *The Twelve Minor Prophets*, p. 132; et al.

[5] E.g., John D. Hannah, "Zephaniah," in *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, p. 1523; et al.

[6] See Patterson, pp. 275–6, and Ralph L. Smith, *Micah–Malachi*, pp. 121–23, for other scholars who held each of these views.

[7] Tremper Longman III and Raymond B. Dillard, *An Introduction to the Old Testament*, p. 472.

[8] Adele Berlin, *Zephaniah*, p. 81.

[9] J. Vernon McGee, *Thru the Bible with J. Vernon McGee*, 3:862.

[10] Quotations from the English Bible in these notes are from the *New American Standard Bible* (NASB), 2020 edition, unless otherwise indicated.

[11] J. Alec Motyer, "Zephaniah," in *The Minor Prophets*, p. 899.

[12] Charles H. Dyer, in *The Old Testament Explorer*, p. 809.

[13] Robert B. Chisholm Jr., *Interpreting the Minor Prophets*, pp. 216–17.

[14] Robinson, p. 133.

[15] Larry Lee Walker, "Zephaniah," in *Daniel–Malachi*, vol. 7 of *The Expositor's Bible Commentary*, p. 540.

[16] Smith, p. 127.

[17] Pusey, 2:225.

[18] J. M. P. Smith, *A Critical and Exegetical Commentary on Zephaniah and Nahum*, p. 176.

[19] Baker, p. 87. Oracles are pronouncements from a deity, in this case Yahweh.

[20] Walker, p. 539.

[21] Kenneth G. Hanna, *From Moses to Malachi*, p. 518.

[22] See Pusey, 2:230–32.

[23] Walter C. Kaiser Jr., *Toward an Old Testament Theology*, pp. 220–21.

- [24]Ibid., p. 223.
- [25]Berlin, p. 15.
- [26]O. Palmer Robertson, *The Books of Nahum, Habakkuk, and Zephaniah*, p. 257.
- [27]Duane L. Christensen, "Zephaniah 2:4–15: A Theological Basis for Josiah's Program of Political Expansion," *Catholic Biblical Quarterly* 46 (1984):682.
- [28]For further discussion, see Patterson, pp. 285–88.
- [29]Pusey, 2:226–27.
- [30]See Motyer, p. 902, for a diagram of the chiasms, as he saw them. A chiasmus is a rhetorical or literary figure in which words, grammatical constructions, or concepts are repeated in reverse order, in the same or a modified form, usually designed to stress the central element in the chiasm.
- [31]C. F. Keil, "Zephaniah," in *The Twelve Minor Prophets*, 2:121.
- [32]Ibid., 2:122.
- [33]J. Sidlow Baxter, *Explore the Book*, 4:220.
- [34]Adapted from G. Campbell Morgan, *Living Messages of the Books of the Bible*, 1:2:289–301.
- [35]See Motyer, p. 898; J. M. P. Smith, pp. 182–83; George Adam Smith, *The Book of the Twelve Prophets, Commonly Called the Minor*, 2:47; and Baker, p. 91.
- [36]Warren W. Wiersbe, "Zephaniah," in *The Bible Exposition Commentary/Prophets*, pp. 426–27.
- [37] *The Nelson Study Bible*, p. 1526.
- [38]Hanke, p. 884.
- [39]Allen, p. 40.
- [40]Berlin, p. 13.
- [41]See M. DeRoche, "Zephaniah 1:2, 3: The 'Sweeping' of Creation," *Vetus Testamentum* 30 (1979):106.
- [42]Allen, p. 35.
- [43]See also Mark Bailey, "The Tribulation," in *The Road to Armageddon*, pp. 60, 62.
- [44]Robertson, p. 260.
- [45]E.g., Leon J. Wood, *A Survey of Israel's History*, p. 370.
- [46]Synecdoche is a figure of speech in which the whole represents a part of it, of a part represents the whole.
- [47]Motyer, p. 912.
- [48]Chisholm, p. 204.
- [49]McGee, 3:866.
- [50]Harry A. Ironside, *Notes on the Minor Prophets*, p. 304.
- [51]Peter C. Craigie, *Twelve Prophets*, 2:114.
- [52]Hannah, p. 1526.
- [53]T. Laetsch, *The Minor Prophets*, p. 358.
- [54]For a brief excursus on the day of the LORD, see Robert B. Chisholm Jr., "A Theology of the Minor Prophets," in *A Biblical Theology of the Old Testament*, pp. 417–18.
- [55]Patterson, p. 310. Cf. Allen, p. 66.
- [56]E.g., Robertson, p. 273.
- [57]Baker, p. 95.
- [58]Keil, 2:131.
- [59] *The Nelson* ⋯, p. 1527; Robertson, p. 278.
- [60]Keil, 2:132; Robert Jamieson, A. R. Fausset, and David Brown, *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*, p. 834; Charles Lee Feinberg, *Habakkuk, Zephaniah, Haggai, Malachi*, p. 48.
- [61] *The Nelson* ⋯, p. 1527.
- [62]Matthew Henry, *Commentary on the Whole Bible*, p. 1167.
- [63]Allen, p. 54. NIV refers to *The Holy Bible: New International Version*.

- [64]McGee, 3:867.
- [65]Jamieson, et al., p. 835.
- [66]Robertson, p. 279.
- [67]Keil, 2:133.
- [68]Ironsides, p. 305.
- [69]Baxter, 4:223.
- [70]Baker, p. 98. NEB refers to *The New English Bible with the Apocrypha*.
- [71]See J. Randall Price, "Old Testament Tribulation Terms," in *When the Trumpet Sounds*, pp. 57–83.
- [72]Motyer, p. 924.
- [73]McGee, 3:869.
- [74]Henry, p. 1168.
- [75]Hanna, p. 516.
- [76]See Wiersbe, pp. 433–35, for an excursus on "the company of the concerned."
- [77]Allen, p. 98.
- [78]Dyer, pp. 810–11.
- [79]Keil, 2:140.
- [80]Feinberg, p. 55. Cf. Jamieson, et al., p. 836.
- [81]Ibid.
- [82]Berlin, p. 102.
- [83]McGee, 3:872.
- [84]Pusey, 2:270.
- [85]Keil, 2:144.
- [86]Feinberg, pp. 56–57.
- [87]Keil, 2:146.
- [88]Patterson, pp. 349–50.
- [89]Motyer, p. 937.
- [90]M. R. Wilson, "Nineveh," in *Major Cities of the Biblical World*, p. 186.
- [91]Robertson, p. 312.
- [92]Motyer, pp. 938–39.
- [93]Ibid., p. 941. Paragraph division omitted.
- [94]Pusey, 2:278.
- [95]Allen, p. 109.
- [96]Pusey, 2:278.
- [97]Feinberg, p. 65.
- [98]Chisholm, *Interpreting the ...*, p. 211.
- [99]Feinberg, p. 66.
- [100]McGee, 3:877.
- [101]Keil, 2:155.
- [102]Wiersbe, p. 429.
- [103]Keil, 2:156. Cf. Isa. 6:5–7.
- [104]Craigie, 2:128; Allen, p. 114.
- [105]Feinberg, p. 67.
- [106]Ibid., p. 68.
- [107]Keil, 2:157.
- [108]Ibid., 2:158.
- [109]Jamieson, et al., p. 838.

[110]Allen, p. 112.

[111]Baker, p. 117.

[112]Robertson, p. 334. Paragraph division omitted.

[113]Henry, p. 1170.

[114]Baker, p. 87.

[115]Patterson, p. 377.

[116]Allen, p. 117.

[117]Baker, p. 119.

[118]Robertson, p. 339.

[119]Allen, pp. 120–21.

[120]Motyer, p. 958.

[121]Dyer, p. 812.

[122]Wiersbe, p. 432.

[123]Stephen J. Bramer, "Suffering in the Writing Prophets (Isaiah to Malachi)," in *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and the Church*, p. 154.

[124]Baker, p. 88.

[125]Baxter, 4:220–21. Paragraph division omitted.